

プロローグ——二〇世紀末のビヒモス

山岳遭難には、おおまかにいって二つのパターンがある。一つは劇的だ。垂直の岩壁を登攀中の転落、あるいは風雪の冬山での大雪崩がそれである。もう一つは、専門用語で「リング・ワンデルング」と呼ぶ環状彷徨などが登山者を疲労凍死に至らせるばあいだ、これは劇的とはいえないがたい。

「方位に関する本能を有しないかぎり、または所有していても極めてそれが微弱なとき、多くの人は目に見る物影のない広い雪の原っぱなどで濃霧に出会ったりすると、おそらくその人は左回りのサークルを描くだろう。いったい霧の中でしばしば方位のズレを修正しながら前進することは至難である」(ジエフリー・W・ヤング『マウンティン・クラフト』一九二〇年)。

一瞬のうちに生死の決まるばあいとちがって、リング・ワンデルングは人に考える時間を十分に与えてくれる。だが、そうしたときにこそ、人はおうおうにして遭難への選択に向かい始める。登山者は前に進むとうとし、進む先にはきつとすぐそこに山小屋が待っているはずだと信じる。だが視界は閉ざされ、寒さと疲労でしだいに焦りが募り、意識は混濁していく。真っすぐ歩いているつもりが、おなじ場

所をぐるぐる回っているだけの徒勞を積み重ね、やがてその場にくずおれるのである。

原子力時代の終焉は、おそらくそんなふうにして訪れるだろう。この二〇世紀半ばに原子爆弾というかたちで生まれおちた「ビヒモス」〔旧約聖書ヨブ記にでてくる巨獣〕——核の巨大技術システムは、いまや深い濃霧の底で彷徨をはじめている。

原子力の全体像はあまりに大きく、それがはたしてどこへ向かって進んでいるのか、容易には判断できない。ありとあらゆる顔をもつこの怪物は、ときには核兵器として、ときには未来のエネルギー源として、国際政治・経済の舞台に登場する。過疎の村に骨肉あいはいむ対立をもたらすかと思えば、あるときはビッグ・ビジネスとして巨額の札ビラが乱れ飛び、また中東の軍事行動を誘発するかと思えば、人びとに電化された「豊かな暮らし」を約束する。通常の兵器を超え、通常の産業を超え、通常の工業技術を超え、通常の政治を超える。そこで人びとは戸惑い、もつともらしいキャッチ・フレーズ、作り話のようなほんとうの話が錯綜する。全体の姿はますます見えなくなっていく。

原子力といっても、原子力発電所だけがすべてではない。天然ウランの採掘にはじまって、精錬・転換、ウラン濃縮、燃料加工、使用済み核燃料の再処理、再処理で取り出したプルトニウムを燃料とする高速増殖炉や新型転換炉、放射性廃棄物の処理処分——これら核燃料の流れに沿うどの部分が欠けても、原子力は原子力でなくなってしまう。日本のばあいも、この核燃料サイクルの輪を完成させようと努力

してきた。そしてそれが完成すれば、原子力の「王国」が成立するはずであり、それこそが国策だった。

しかし、その「王国」建設への道は、じつに泥沼の消耗戦をしいられつつある。ただ、戦線があまりにも遠く拡大しているために、実際の戦況はほとんど把握できない。勝っているのか敗れているのか。

「いまは「シンガポール陥落」あたりじゃないかね」——国際的にも名の知られたある原子力関係者が皮肉をこめてこう語ったのは、三年ほどまえだった。そのころから日本の原子力開発は動揺しはじめた。広域の放射能汚染をとまらぬ重大事故があったせいではない。悲劇的なきっかけは一つもなかった。だが、原子力は動揺しているのである。いったい、なぜなのか——。

原子力委員長代理・向坊隆は、核兵器国イギリスについておもしろいエピソードを語っている。一九六七年十月、有名な『ウ・タント・レポート』(核兵器白書)が国連から発表されたが、この非公開で行なわれたレポート作成作業に専門委員として向坊も参加した。そのとき、イギリスの専門委員がつぎのようにのべたという。

「イギリスの経済が傾いてしまったのは、核兵器をもったからだ」

ここでいう「核兵器」とは、爆弾だけのことではない。核弾頭の生産、ミサイルなど運搬手段の開発、核管理のために必要な体制などすべてを含む核兵器システムのことである。第二次世界大戦で精力を使い果たしたイギリスは、米ソにつぐ第三の核兵器国となったものの、その重荷のために国家経済が破綻したというわけだ。

ある識者はこうもいう。

「フランスがなぜあれほど原子力開発に積極的かといえば、自国に核兵器システムをつくってしまつたからだ。その核産業を維持するためには、原子力発電を大々的に進めるのがいちばんよい」

この解釈は、かつてのアメリカにも当てはまるかもしれない。核兵器開発のためにマンハッタン計画らしい膨大な国家資金を研究に投じてきたアメリカは、やがて核兵器システムで培つた技術力を民需、いわゆる平和利用のために開放する決断を下す。それを加速させたのはイギリスだった。アメリカが原子力潜水艦用動力炉の開発に熱中していたころ、イギリスは独自に原子力発電研究を進め、一九五三年にコールドホール炉建設計画を発表した。原子力発電分野でイギリスに世界の市場を先取りされるのを嫌つたアメリカは、原子力潜水艦用動力炉の技術などを発電用に切りかえ、世界市場に乗り出していた。軍需のために注ぎ込んだ投資を民需拡大で回収しようという意図もそこにはあつたにちがいない。アメリカの原子力産業は、こうして一九六〇年代から七〇年代前半に黄金時代を迎えるのである。

ところが、そのアメリカでいま、原子力発電所の建設契約キャンセル、商業再処理工場と高速増殖炉 CRR の建設中止があいついでいる。原子力産業は新規受注も途絶え、未来への希望を失いつつある。議会技術評価局 (OTA) は最近、『不確実性時代の原子力』と題するレポートをまとめ、瀕死の原子力産業を蘇生させる方法を探ろうとしている。イギリスでは、とうの昔に原子力産業の成長は止まつた。自由主義圏でもっとも威勢のよかつたフランスは、ジスカールデスタンの一九七〇年代に絶頂をきわめ

たが、八〇年代にはいつて徐々に綻びをみせはじめた。おそらくアメリカがたどつたのとおなじ道を歩んでいくにちがいない。

一九四五年八月七日、アメリカの初代原子力委員長となるデイビッド・E・リリエンソールは、日記でこう予言した。

「この研究が非軍事用の分野に入っていくにつれて、アメリカの政府や経済生命に対するその影響は、非常に大きなものになりうる。産業界はこれを支配しようとするだろう。そして始めはうまくいくかもしれない。しかし、時が進むにつれて、このようなわが人類全体の運命の支配力ともいえるものを、私企業の手に乗ねることができないことは明らかに becoming だろう」(『リリエンソール日記』第二巻二一九頁、みすず書房)。

軍事研究から出発し、それを非軍事用にも転用することで、軍需・民需双方から支えられてきたアメリカ、フランス、イギリスの原子力産業が危機を迎えている。

それでは、軍事利用を避けてきた日本はいったいどうなるかとしているのか。核兵器システムをもつ以上に、核燃料サイクルを含む原子力発電システムを完成させるのはむずかしい。なぜなら、前者は商業採算性を無視してよく、後者は経済ベースに乗らなければ生き残れないからである。不幸にもいふべきか、幸運にもいふべきか、日本はまだ核燃料サイクルを技術的にも商業的にも完成させていない。だが、国策として、これを「確立」することを最大の目標としてきた。「確立」しなければ、原子力発

電システムは完成したとはいえないからだ。

その日本の原子力開発がいま動揺しはじめている。ここでもう一度問わなければならない——いったい原子力はどこへ行くこうとしているのか、と。

## 第一章 異変

半分も飲まないうちに、頭が天井につかえて、首が折れないように、ごまなければなりません。アリスは慌てて罎をおろしてひとりごとを申しました「これでたくさん、もう大きくならないといいわ。今でも戸口から出られないわ。こんなに飲まなけりゃよかったものを！」あわれ、それは後の祭りでした。アリスはずんずん大きくなって、じきに床に膝を落とさねばなりませんでした。

——ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』

(角川文庫版)